

| | |
|------------------|---|
| Title | 「スピリチュアルケアの可能性」報告（2014年度 第2回スピリチュアルケア研究会：東京スピリチュアルケア研究会共催） |
| Author(s) | 松本, 周 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :18-18 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5259 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度 第2回スピリチュアルケア研究会 (東京スピリチュアルケア研究会共催) 「スピリチュアルケアの可能性」報告

10月10日、駒込の学校法人聖学院新館にて標記研究会が開催された。参加者21名、医療・福祉関係者、キリスト教牧師、仏教僧侶、など多様な出席者であった。田村綾子准教授より「スピリチュアルケアの可能性～精神保健福祉領域の実態からの一考察～」と題して講演をいただいた。先生は精神保健福祉士・社会福祉士であり、現職に就かれる前に病院ソーシャルワーカーとして長年勤務された。また近年はスピリチュアルケアへの関心から、東京看取人プロジェクト研修生として学ばれている背景から、精神保健福祉士のご経験とスピリチュアルケアとの関係について語られた。

最初に精神保健福祉士の臨床例を紹介され、スピリチュアルケアの必要性は存在しながらも、精神保健福祉士の直接的関わりの難しい現状が述べられた。理由として、精神保健福祉士の働きが生活実態の変化・発展に支援の価値を置きがちであり、未来志向の支援であるため、死を前にした方への支援において役割を見出しづらいことが指摘された。精神障害者の置かれている状況を考えるとき、社会の偏見に直面して社会的存在としての死を意識せざるを得ないスピリチュアルペインの存すること、さらには毎年2万人もが死亡退院となる現状において精神保健福祉士が死に関わっていくことが求められているのではないかとの指摘もされた。その上で、精神保健福祉士への聞き取りから読み取れる実態としては、「ターミナル期にある利用者の支援経験」は「ない」と答える者がほとんどであること、「スピリチュアルケア」という言葉を「聞いたことがある」という者はきわめて少ないこと、患者・利用者から「葬儀や死後のことについて相談を受けた経験」が「ある」と答える者は少ないことが述べられた。加えてスピリチュアルケア実践の困難さとして、支援する上で「患者・利用者の信仰について気にかける」

ことは「布教活動の禁止」「集団内での影響への懸念」が多いということにも触れられた。これらを踏まえて、東京看取人プロジェクトにおける自身の実習体験が紹介され、精神科病院勤務時には患者の最期の日々に関わることは発想していなかったこと、宗教的なものを媒介として患者との関係性が深められたと考察された。

まとめとして、スピリチュアルケアを「ターミナルケア」に限定しなければ、精神科医療と精神保健福祉領域におけるニーズは高いと考えられる。また精神保健福祉士が制度紹介など「目に見える」支援をするだけでなく、患者・利用者の語りに聞き、スピリチュアルペインを受け止める、スピリチュアルケアの力量を習得する必要があるのではないか。以上のように結ばれた。質疑応答では、医療・福祉現場でのスピリチュアルケア普及の方途について、活発な意見交換がなされた。



左上：窪寺教授、右上：田村准教授（発題者）

(文責：松本 周 [まつもと・しゅう] 聖学院大学
基礎総合教育部助教)